

一九九九年八月二二日

みこころを知るために（一五）

創世記一章二六節～二八節

私たちに對する神さまのみこころは、永遠の聖定と呼ばれる、神さまの「永遠のみこころ」から出ています。神さまの聖定は、この世界のすべてのもの、在り方を、その複雑な関わりをも含めて、初めから終わりまで、永遠に定められておられるものです。それは、無限に複雑なみこころで、私たちの限りある理解力を無限に超えています。

神さまは、「永遠のみこころ」を、創造の御業と摂理の御業によって実現されます。創造の御業は「永遠のみこころ」に従って遂行されましたし、摂理の御業も「永遠のみこころ」に従って遂行されています。それで、創造の御業と摂理の御業のうちに、神さまの「永遠のみこころ」は、この世界に向けて――従って、私たちに分かるように、表現されています。私たちは、創造の御業と摂理の御業を通して、神さまのみこころを知ることができます。

この世界のすべてのものが神さまのみこころに従って造られていますので、造られたすべてのものが神さまのみこころを表現しています。また、神さまは、摂理の御業において、お造りになったすべてのものを、みこころに従って支え、導かれますので、摂理の御業を通して神さまのみこころが表現されていきます。

*

人間は、何の理由も目的もなく、何かの弾みに、この世界に出現したものではありません。人間は、神さまの「永遠のみこころ」に従って、造られたものであり、神さまの「永遠のみこころ」に従って、御手によって支えられ、導かれていきます。それで、人間の存在自体が神さまのみこころを映し出しています。

私たちが、神さまのみこころを知ることとの関わりで言いますと、私たちがどのようなものとして造られているかを知ることが、神さまのみこころを知ることの第一歩です。

私たちがどのようなものとして造られているかということでは、いちばん基本的なことは、創世記一章二六節、二七節の、

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配せよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

という御言葉に示されていますように、「神のかたち」に造られており、「歴史と文化を造る使命」を委ねられた。

私たちが「神のかたち」に造られており、「歴史と文化を造る使命」を委ねられているということは、私たちに對する神さまのみこころの最も基本にあって、その他のすべてのみこころの土台であり、その他のすべてのみこころを規定しています。言い換えますと、私たちに對する神さまのみこころは、私たちが「神のかたち」に造られており、「歴史と文化を造る使命」を委ねられているということの枠の中にあり、そのこととつながっています。

それで、私たちは、自分が「神のかたち」に造られており、「歴史と文化を造る使命」を委ねられているということとを離れて、あるいは、それを無視して、神さまのみこころを正しく受け止めることはできません。

*

これに對しまして、聖書の御言葉を通して示されている神さまのみこころの中でいちばん基本的で大事なみこころは、人が救われることであり、そのことを離れては、神さまのみこころを正しく受け止めることはできないのではないかと主張されるかもしれませんが。

確かに、テモテへの手紙第一・二章四節～六節では、

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。

と言われていますように、神さまは、「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」。そして、そのために、イエス・キリストは「すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。」

また、確かに、このことは、私たちのあかしの中心です。パウロも、続く七節で、

そのあかしのために、私は宣伝者また使徒に任じられ——私は眞実を言うており、うそは言いません。——信仰と眞理を異邦人に教える教師とされました。

と述べています。

*

けれども、神さまは、何のために、人間をお造りになつたのでしょうか。繰り返しになりますが、そのことを示しています創世記一章二六節では、神さまは、人間を「神のかたち」にお造りになり、これに「歴史と文化を造る使命」をお委ねになつたと記されています。

神さまが人間を「神のかたち」にお造りになつて、これに「歴史と文化を造る使命」をお委ねになつたのは、人間がご自身との愛の交わりにあつて生きるようになるためです。

神さまのさまざまなご性質をまとめて総合的に表わすものは、神さまの愛です。すでに色々な機会にお話ししましたが、三位一体の神さまは、御父と御子と御霊の永遠の愛の交わりのうちに充足しておられます。そして、神さまがこの世界をお造りになつたのは、神さまがご自身の愛をご自身の外に向けて表現されるためです。

無限に豊かであり、完全な愛のうちに、永遠に充足しておられる神さまは、その愛をもつてお造りになつたものを満たしてください。すべてのものは、神さまの愛と恵みの御手によつて造られ、その御手によつて支えられています。

まことに、主のことは正しく、

そのわざはことごとく眞実である。

主は正義と公正を愛される。

地は主の恵みに満ちている。

詩篇三三篇四節、五節

けれども、すべてのものがそのことを知っているわけではありません。そのことを知っているのは、「神のかたち」に造られている人間です。人間は、この世界に向かつて表現されている神さまの愛を受け止めて、その愛に応答することができるものとして、「神のかたち」に造られています。

人間は、ただ、造られたすべてのものが神さまの愛と恵みの御手に支えられているという、一般的な事実を知っているだけではありません。自分自身が、神さまの愛に包まれて生きているのです。そして、その愛に応えて、神さまを愛

して生きるのです。それが、「神のかたち」に造られている人間の本来の姿です。

「神のかたち」に造られた人間に「歴史と文化を造る使命」が委ねられたのも、造り主である神さまとの愛の交わりに生きている人間が、神さまの愛に包まれていることによつて充足しているものとして、神さまがお造りになったこの世界と、その中にあるすべてのものを治め、神さまのご栄光を豊かに現わす世界へと整えていくためです。

人間は、神さまとの愛の交わりのうちに充足しているなら、自らの愛を十分に表現できるようになります。そうすれば、自分の手に委ねられているこの世界と、その中に生きているものたちを治める時には、自分の利益を計つて、それらのものを押さえつけて搾取することはなく、むしろ、すべてのものに仕えるようになります。ですから、「歴史と文化を造る使命」を委ねられた人間が造る歴史と文化は、本来、「神のかたち」に造られている人間のうちから生み出される愛の表現の結果であるのです。

これが、人間が「神のかたち」に造られた理由です。

ただ、人間は、造り主である神さまに対して罪を犯して墮落し、神さまとの愛の交わりにあるいのちを失つてしまい、死と滅びの中に転落してしまったことによつて、神さまとの愛の交わりによつてもたらされる、いのちの充足を失つてしまいました。その結果、人間が造る歴史と文化には、罪の自己中心性が表現されるようになってしまいました。

*

人間が救われなくてはならないのは、人間が欠けのあるものとして造られたからではありません。人間が救われなくてはならないのは、人間が造り主である神さまに対して罪を犯して、神さまとの愛の交わりにあるいのちを失つてしまい、死と滅びの中に転落してしまつたからです。ですから、人間は、救われるために造られたではありませんし、救われるべきものとして造られたのでもありません。

不幸にして、子どもが事故に遭つて大怪我をしてしまったとします。その時、親の願ひは、子どもの怪我が治ることです。そのために、子どもを入院させて怪我を治そうとします。その意味では、子どもの怪我を治すことは、親の願ひです。しかし、怪我が治ることは、その子どもが生まれてきた理由ではありません。その子が生まれてきたのは、家族の愛の中にあつて成長し、その子らし

く生きるためです。

それと同じように、人間が神さまに対して罪を犯して、神さまとの愛の交わりにあるいのちを失ってしまい、死と滅びの中に転落してしまったので、神さまは、「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」。そして、そのために、イエス・キリストは「すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。」けれども、救われることは、人間が「神のかたち」に造られた理由ではありません。

先ほどの例で言いますと、怪我が治った子どもは、再び、家族やお友だちとの交わりの中に生きるようになります。治療を受けて怪我が治ることは、家族やお友だちとの交わりの中に生きるようになるためです。(もちろん、怪我をして入院している状態でも、家族やお友だちとの交わりはできます。これは、あくまでも、ものたとえです。)

それと同じように、私たちが救われるのは、それによって、私たちが「神のかたち」に造られた本来のいのちを回復していただいて、神さまとの愛の交わりの中に生きるようになるためです。ですから、罪と死の力に縛られている人々が、滅びへの道から救い出されることは神さまのみどころですが、それは、天地創造の初めに神さまが人間を「神のかたち」にお造りになったことに表わされているみこころを実現してくださるためです。

*

神さまが、「自身の「永遠のみこころ」に従って、私たちを「神のかたち」にお造りになり、「歴史と文化を造る使命」を委ねてくださったのであれば、私たちに対する神さまのみこころは、基本的には、神さまが私たちを「神のかたち」にお造りになり、「歴史と文化を造る使命」をお委ねになつてくださった、ということを受け入れて、そのことに忠実であることにあります。

このことは、私たちの間の、「統一性」と「多様性」という二つの方向で考えていく必要があります。

まず、「多様性」という点から言いますと、私たち一人一人は、さまざまな点で違っていています。それぞれが違った個性をもっていますし、違った立場にあります。そして、神さまは、私たちそれぞれの個性や立場の違いをすべてご存知であられますし、それぞれにふさわしいみこころをもっておられます。それで、神さまのみこころも、私たちそれぞれに対して違ったものとなるはずです。

有限であるばかりでなく、罪の自己中心性のために、人を手段化しがちな人

間の場合には、全体主義的になつて、ある目的のためには個々の違いを無視して、十把一からげの扱いをしてしまうということがあります。しかし、神さまにはそのようなことはありませんし、私たちそれぞれに、それぞれの特性と立場を与えてくださつておられることを、ご自身が踏み破つてしまわれるようなことはありません。

このことは、神さまのみこころを受け止めるうえで、どうしてもわきまえておかなくてはならないことです。

私たちそれぞれのこととしましては、私たちそれぞれが自分自身のことをよく理解し、自分自身と自分に与えられている特性や賜物を認めて受け入れるとともに、それを大切にすることが神さまのみこころです。

このようなことに疑問を持たれる方がおられるかもしれませんが。—— 自分自身と自分に与えられている特性や賜物を大切にすることは、自己中心となることではないか、というような疑問です。確かに、実際には、自己中心的な動機と方法で、自分自身と自分に与えられている特性や賜物を大切にしようとすることがあります。けれども、それは、人間が罪によつて墮落して、罪の自己中心性が、私たちを支配するようになってしまったことによつています。

けれども、御子イエス・キリストの十字架の死による贖いの御業にあずかつて、罪を贖われている者は、自分が造り主である神さまによつて造られたものであり、自分に与えられている特性や賜物は神さまからの賜物であることを認めています。そして、そのことを理由として、自分自身と自分に与えられている特性や賜物を大切にします。

神さまがこのようなものとしてお造りになつた自分自身と、与えてくださった特性と賜物を受け入れて、それを大切にして磨いていくことは、神さまを自らの造り主として告白することにつながっています。そこから、神さまを中心とした生き方が生まれてきます。

また、改めて申すまでもないことですが、私たちが、自分自身と自分に与えられている特性や賜物を大切にすることは、私たちの罪をもそのまま受け入れるということではありません。なぜなら、私たちの罪は、本来の私たち自身と賜物を腐敗させ、自己中心的に歪めるものだからです。むしろ、そのような罪を、御子イエス・キリストの十字架の死による罪の贖いによつて贖っていたとき、罪の聖めを通して、本来の姿を回復していただくことが、自分自身と自分に与えられている特性や賜物を大切にすることです。

*

先ほどお話ししましたように、限りがあるだけでなく、罪によって汚染されている人間は、全体主義的になって、ある目的のために、それぞれの違いを無視して、十把一からげの扱いをしようということがあります。この世においては、事業の成功のためという名目で、効果や効率が第一のこととされますので、このようなことが起こります。

しかし、御子イエス・キリストが治めておられる神の御国では、そのようなことはありません。なぜなら、イエス・キリストは、決して、私たちを「事業」のための手段とされることはありませんし、十把一からげにして扱うことはなさらないからです。また、私たちそれぞれの特性や賜物の違いを無視して、皆が画一的なものとなったり、画一的な考え方をするように導かれることはないからです。

教会は、イエス・キリストをかしらとして、神の御国を表現します。ですから、教会では、私たちそれぞれが、自分が造り主である神さまによって造られたものであり、自分に与えられている特性や賜物は神さまからの賜物であることを認めて、自分自身と自分に与えられている特性や賜物を大切にするとともに、お互いに対しても、そのことを当てはめて、それぞれの特性と賜物を大切にしないでなりません。——人が自分のように考えないからとか、自分のようにしないからとかいうことで、先走って、さばいたりしてはならないのです。特に、「大切な事業」をしているということが理由になって、そのようなことが起こりがちですが、もしその「事業」が主の栄光のためであるなら、全体主義的になってしまう危険を注意深く避けなくてはなりません。

*

それと同時に、私たちの間の「統一性」という点からしますと、私たちは、みな、「神のかたち」に造られており、「歴史と文化を造る使命」を委ねられているという点で、共通しています。

私たちすべては、「神のかたち」に造られており、「歴史と文化を造る使命」を委ねられていますので、神さまを愛し、神さまを崇めるべきですし、お互いに愛し合い、仕え合うべきであるのです。また、私たちが、神さまに対しても、お互いに対しても、真実であるべきであるのも、あらゆる機会に、聖さと義と平和を追い求めるべきであるのも、私たちが「神のかたち」に造られており、「歴史と文化を造る使命」を委ねられているからです。

先ほどお話ししましたように、私たちは、それぞれ違った特性と賜物を与えられていますので、それを大切にして磨かなければなりません。それは、決して自己中心的なことではありませんし、個人的なことでもありません。むしろ、それによって、「神のかたち」に造られ、「歴史と文化を造る使命」を委ねられているものとして、神さまを愛して神さまに仕え、お互いを愛してお互いに仕え合うようになるのです。コリント人への手紙第一・一二章四節～七節で、

さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。しかし、みな益となるために、おのにおに御霊の現われが与えられているのです。

と言われているとおりです。

「この「統一性」と「多様性」ということは、「全体」と「個」とが、「一」と「多」という形で、人間の思想の歴史の中で、その調和の原理が問題となってきました。実は、「統一性」と「多様性」の完全な調和は、三位一体の神さまご自身の在り方に見られるものです。

神さまの「本質」あるいは「実体」は一つであるという意味で、神さまはただおひとりです。それと同時に、神さまは、御父、御子、御霊の、三つの位格（人格）において存在されます。御父は神であり、御子は神であり、御霊は神です。また、御父と御子と御霊は、それぞれ別の位格（人格）です。けれども、神さまの本質あるいは実体は一つです。三位一体の神さまにあっては、神さまの本質あるいは実体は一つであるという「統一性」と、神さまは御父、御子、御霊の、三つの位格（人格）において存在されるという「多様性」が、完全に調和しています。

この世界の「統一性」と「多様性」の源は、三位一体の神さまご自身です。——この世界が、驚くばかりの変化と多様性に満ちていながら、そこにさまざまな法則があるように統一性のある世界であることは、三位一体の神さまの在り方が、神さまがお造りになった世界の在り方に反映しているということであると、考えられます。